

小学校で外国語を担当する教師の思い

～ソウル日本人学校と東京韓国学校の外国語担当教師への調査から～

奥野浩子 今井 文 鹿嶋英愛 栗林美幾
成田考児 成田美映子 斎藤誠子 多田恵実

0. はじめに

本稿は、小学校で英語に加えてもう一つの外国語を取り入れている、ソウル日本人学校小学部（ソウル特別市麻浦区）と東京韓国学校初等部（東京都新宿区）の外国語担当教師へのアンケート調査と聞き取り調査の結果をまとめたものである。この調査は、科研費（課題番号23652127、研究課題：青森県の小学校に二つの外国語を導入するための予備的調査研究）の助成により行われた。

ソウル日本人学校は、「ソウル及びその周辺に駐在する日本人保護者の子女に対し、日本国憲法、教育基本法、学校教育法に従い、文部科学省の定める学習指導要領を基準とし、初等及び中等普通教育を施すことを目的とする」（ソウル日本人学校規則第1章第4条）学校である。

東京韓国学校は、「世界化・情報化・知識化時代を主導する為に役に立ち尊敬される韓国人の育成」を目標とし、「国語、英語、日本語3カ言語の無理のない駆使能力涵養」等に重点を置いて（東京韓国学校 HP「2011教育概要」）いて、「（韓国の）教育基本法及び小・中等教育法、7次教育課程、在外国民教育の目標と同時に民族教育機関の役割も果たしつつ国際学校の機能を生かすことのできる特殊な役割」を教育の基底としている（東京韓国学校 HP「本校教育の基底」）。

両校はともに、本国の教育基本法等に従った在外教育機関で、両校の小学生はともに、英語に加えて現地語を学習しているという共通点がある。小学校で二つの外国語を学ぶ生徒¹と、それを指導する外国語担当教師に、アンケートと聞き取り調査を行って、複数外国語学習・指導の実情を知り、青森県の小学校でも英語に加えて韓国語を導入する可能性を探るのが調査の目的である。

ソウル日本人学校での調査は、平成24年6月18日から6月22日まで、生徒への調査と合わせて行った。ソウル日本人学校小学部では、英語に加えて現地語である韓国語の授業が行われている。「英会話」の授業は、1年生から6年生まで週に1回あり、5年生と6年生には週に1回「外国語活動」も行われている。「韓国語」の授業は、1年生から6年生まで週に1回行われている。ソウル日本人学校では、英語担当教師4名と韓国語担当教師3名に、アンケート調査と聞き取り調査に応じてもらった。

東京韓国学校での調査は、平成24年9月10日、生徒への調査と合わせて行った。東京韓国学校初等部では、英語に加えて現地語である日本語の授業が行われているが、教科の授業を英語で行う

イマージョン教育も実施されている。いわゆる「英語」の授業は「統合英語」(Language Arts)と称され、1年生と2年生では週に3回、3年生では週に5回、4年生から6年生では週に6回行われている。イマージョン教育としては、「理科」を1年生と2年生では週に2回、3年生から6年生では週に3回、「算数」を1年生と2年生では週に2回、3年生から6年生では週に1回、「体育」を1年生から3年生で週に1回、「音楽」を1年生から6年生まで週に1回、「図工」を1年生と2年生で週2回行っている。1年生から6年生まで、全学年でイマージョンの授業と「統合英語」を合わせて、英語の授業が週に11回行われている(下の表を参照)。「日本語」の授業は、日本の「国語」(新宿区の小学校で使用の光村図書)の教科書を使用して、1年生から6年生まで全学年で週4回行われている。東京韓国学校では、英語担当教師(イマージョン教育だけを担当する教師も含む)17名と日本語担当教師10名が、アンケート調査と聞き取り調査に応じてくれた。

| 科 目 | 学 年 | | | | | |
|---------------|------|------|------|------|------|------|
| | 1 学年 | 2 学年 | 3 学年 | 4 学年 | 5 学年 | 6 学年 |
| Language Arts | 3 | 3 | 5 | 6 | 6 | 6 |
| 理科 (科学) | 2 | 2 | 3 | 3 | 3 | 3 |
| 算数 (数学) | 2 | 2 | 1 | 1 | 1 | 1 |
| 体育 | 1 | 1 | 1 | --- | --- | --- |
| 音楽 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 |
| 図工 (美術) | 2 | 2 | --- | --- | --- | --- |
| 合 計 | 11 | 11 | 11 | 11 | 11 | 11 |

() 内は東京韓国学校での名称

1. 調査対象教師について

ソウル日本人学校の英語担当教師4名と韓国語担当教師3名、東京韓国学校の英語担当教師17名と日本語担当教師10名、合わせて34名が調査に応じてくれた。

聞き取り調査の前に、①年齢、②性別、③担当外国語が母語かどうか、④母語でない場合、どのようにその言語を習得したか、⑤担当外国語の指導歴、⑥現任校での指導歴、⑦4技能(話す・書く・聞く・読む)を教える時の難しさの順番、⑧言語のほかに教えていること、⑨現任校で外国語を二つ学ぶ必要性和その理由、⑩現任校での担当外国語の授業時数の適切性について、アンケート調査票に記入してもらった。この集計結果は次の通りである。

年齢については、答えたくないという反応が多かったが、次のような年齢分布であった。無回答は全て、英語担当教師である。最年少は25歳、最年長は57歳で、34名のうち半数の17名が25歳から44歳である。

| 年齢 | 25~29 | 30~34 | 35~39 | 40~44 | 45~49 | 50~54 | 55~59 | 無回答 | 合計 |
|----|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|------|-----|
| 人数 | 3 | 4 | 2 | 8 | 0 | 1 | 2 | 14 | 34 |
| % | 8.8 | 11.8 | 5.9 | 23.5 | 0 | 2.9 | 5.9 | 41.2 | 100 |

性別についても、明かしたくないという反応が多かったが、ここでも、無回答はすべて英語担当教師である。調査員は調査相手の性別を知っているが、回答者の意向に従って、無回答のままにする。

| 性別 | 男性 | 女性 | 無回答 | 合計 |
|----|-----|------|------|-----|
| 人数 | 3 | 21 | 10 | 34 |
| % | 8.8 | 61.8 | 29.4 | 100 |

授業を担当する外国語が母語かどうかについての回答は次の通りである。母語話者の割合が60%以上で、母語でない場合でも、全員が、その言語使用圏での生活経験があり、最長で30年、最短でも3年であった。

| 母語かどうか | 母語である | 母語ではない | 無回答 | 合計 |
|--------|-------|--------|-----|-----|
| 人数 | 21 | 12 | 1 | 34 |
| % | 61.8 | 35.3 | 2.9 | 100 |

授業担当の外国語の指導歴は、最短で1年半、最長で28年で、その分布は以下の通りである。

| 指導歴 | 5年未満 | 5~10年 | 11~15年 | 16~20年 | 21~25年 | 26~30年 | 無回答 | 合計 |
|-----|------|-------|--------|--------|--------|--------|-----|-----|
| 人数 | 7 | 14 | 4 | 3 | 1 | 2 | 3 | 34 |
| % | 20.6 | 41.2 | 11.8 | 8.8 | 2.9 | 5.9 | 8.8 | 100 |

現任校での指導歴は、最短で1カ月、最長で16年で、次のような分布である。

| 現任校 | 1年未満 | 2~5年 | 6~10年 | 11~15年 | 16~20年 | 無回答 | 合計 |
|-----|------|------|-------|--------|--------|------|-----|
| 人数 | 4 | 16 | 3 | 1 | 1 | 9 | 34 |
| % | 11.8 | 47.1 | 8.8 | 2.9 | 2.9 | 26.5 | 100 |

4技能（「話す」、「書く」、「聞く」、「読む」）を教える際の難しい順番（最も難しいを1とする）については、33名から回答があった。そのうち1名は、2技能については指導していないということ

で2技能についてのみの回答をしていて、2名は、複数の技能に同じ順番をつけている。1（難）、2、3、4（易）の順序は多種多様であるが、複数回答があったものをあげると、難しい順に、「書く－読む－話す－聞く」が4名、「聞く－話す－読む－書く」が3名、「話す－書く－聞く－読む」が2名、「話す－聞く－書く－読む」が2名、「書く－聞く－話す－読む」が2名、「読む－聞く－話す－書く」が2名、「聞く－書く－読む－話す」が2名、「聞く－読む－書く－話す」が2名である。多種多様な回答であるが、技能別に集計した結果は次の通りである。詳しい分析は別の機会にするが、「話す」や「聞く」という「音声言語」が、「書く」や「読む」という「文字言語」より、少しばかり教えるのが難しいと感じているようである。

| 話す | 1（難） | 2 | 3 | 4（易） | 無回答 | 合計 |
|----|------|------|------|------|-----|-----|
| 人数 | 10 | 7 | 11 | 5 | 1 | 34 |
| % | 29.4 | 20.6 | 32.4 | 14.7 | 2.9 | 100 |

| 書く | 1（難） | 2 | 3 | 4（易） | 無回答 | 合計 |
|----|------|------|------|------|-----|-----|
| 人数 | 9 | 6 | 9 | 8 | 2 | 34 |
| % | 26.5 | 17.6 | 26.5 | 23.5 | 5.9 | 100 |

| 聞く | 1（難） | 2 | 3 | 4（易） | 無回答 | 合計 |
|----|------|------|------|------|-----|-----|
| 人数 | 12 | 10 | 4 | 7 | 1 | 34 |
| % | 35.3 | 29.4 | 11.8 | 20.6 | 2.9 | 100 |

| 読む | 1（難） | 2 | 3 | 4（易） | 無回答 | 合計 |
|----|------|------|------|------|-----|-----|
| 人数 | 3 | 11 | 9 | 9 | 2 | 34 |
| % | 8.8 | 32.3 | 26.5 | 26.5 | 5.9 | 100 |

言語の他に教えていることとして、その言語圏の「習慣」、「行事」、「マナー」の3つから選んでもらった（複数回答可）ところ、「習慣」は26名（76.5%）、「行事」は28名（82.4%）、「マナー」は31名（91.2%）が取り上げている。他に、「遊び」や「食べ物」や「社会」や「ニュース」など、言語以外のさまざまな面を授業で取り上げているようである。

ソウル日本人学校でも東京韓国学校でも、英語に加えて現地語という二つの外国語を教えているが、勤務校での「外国語を二つ学ぶ必要性」を聞いた結果は以下の通りである。選択肢としては「不必要だがよい」はなかったが、2名がこの答えを記入している。「必要である」という回答は約65%と、かなり高い割合を示している。

| 必要性 | とても必要 | 必要 | あまり必要でない | 全く必要でない | 特に意見はない | 不必要だがよい | 無回答 | 合計 |
|-----|-------|------|----------|---------|---------|---------|-----|-----|
| 人数 | 9 | 14 | 3 | 1 | 2 | 2 | 3 | 34 |
| % | 26.5 | 41.2 | 8.8 | 2.9 | 5.9 | 5.9 | 8.8 | 100 |

「外国語を二つ学ぶ必要性」とともにその理由を7つの選択肢から選んでもらった（複数回答可）。この「理由」については、上の「必要性」に対して、「特に意見はない」と回答した教師も「無回答」の教師も回答し、34名全員から回答を得た。選択肢は、①英語に加えて現地語を学ぶのは当然である、②複数の外国語を学ぶことで多角的な視野がもてるようになるから、③小さいうちから、言語や文化の多様性を認識できるようになるから、④小学校では外国語の学習は英語だけでよい、⑤小学校では日本語の学習を重点にやるべきである（ソウル日本人学校バージョン）、⑥小学校では現地語である日本語だけでよい（東京韓国学校バージョン）、⑦（東京韓国学校のみ）小学校では母国語である韓国語だけでよい、⑦その他、の7つで、「その他」には記述スペースを設けた。

| | 現地語は当然 | 多角的視野 | 多様性 | 英語だけ | 日本語だけ | 韓国語だけ | その他 |
|----|--------|-------|------|------|-------|-------|------|
| 人数 | 17 | 25 | 25 | 1 | 0 | 1 | 9 |
| % | 50.0 | 73.5 | 73.5 | 2.9 | 0 | 2.9 | 26.5 |

「必要性」に対して、否定的な回答をした教師の理由からみてもみる。「全く必要でない」（1名）と回答した理由は、「児童に負荷がかかりすぎる」というものであった。「あまり必要でない」（3名）と回答した理由として、1名が「日本の子どもたちは、多くが第3言語を使うことはないから」、他の1名は、二つの外国語を学ぶことは「②多角的な視野がもてるようになり」、「③言語や文化の多様性を認識できるようになる」とプラス面を認めながらも、勤務校では「母語だけでよい」としていて、あと1名は、「小学校では英語だけでよい」というものである。

「特に意見はない」と回答した（2名）うちの1名は、「①英語に加えて現地語の学習は当然」と回答し、あと1名は「小学校では、プラス面もあるがマイナスも少なくないから」と回答している。「無回答」（3名）のうち、1名は、「②多角的な視野がもてるようになり」、「③言語や文化の多様性を認識できるようになる」というプラス面に、さらに「多種多様な世界で、さまざまな職種に着く可能性が増える」とプラス面を加えていて、あと1名は、「①英語に加えて現地語の学習は当然」、「②多角的な視野がもてるようになり」、「③言語や文化の多様性を認識できるようになる」というプラス面に、さらに「早いうちから基本的・批判的な考え方が身につく」を挙げていて、残る1名は、「①英語に加えて現地語の学習は当然」、「②多角的な視野がもてるようになり」、「③言語や文化の多様性を認識できるようになる」の3つを選んでいる。

現任校での担当外国語の授業時数が適切かどうかについては、「減らすべき」という回答はなく、

現状でよいとする回答が60%近くであるが、増やすべきという意見も40%近くある。

| 授業時数 | 今のままでよい | 増やすべき | 減らすべき | 無回答 | 合計 |
|------|---------|-------|-------|-----|-----|
| 人数 | 20 | 13 | 0 | 1 | 34 |
| % | 58.9 | 38.2 | 0 | 2.9 | 100 |

2. 聞き取り調査の方法と内容

ソウル日本人学校での聞き取り調査は教師の空き時間を利用して行った。調査員は青森グローバル教育研究会のメンバー5名で、調査対象の7名のうち6名に対しては日本語で、1名に対しては英語で行った。東京韓国学校での聞き取り調査は、教師の空き時間と放課後の時間を利用して行った。調査員は青森グローバル教育研究会のメンバー4名と、東京女子医科大学准教授の鈴木光代氏の5名で、調査対象の27名に対して、17名には英語で、8名には日本語で、2名には韓国語で行った。調査が一日に限られた東京韓国学校の外国語担当教師には、事前に調査票を配布したため、調査実施日前に、聞き取り調査の質問に対する答えを記入してくれた教師もいた。

聞き取り調査は、調査員と対象教師が一对一の面談形式で行い、許可を得られた場合には録音して、後で、録音を再生しながら調査員が調査票に日本語で回答を記入した。大多数は録音を許可してくれたが、数人は録音を拒んだので、面談しながら調査員が回答を日本語で調査票に記入した。全ての聞き取り調査票から、質問項目別に回答を並べ、その回答をいくつかのカテゴリーに分類してみた。また、回答が質問に対応していない場合には、適宜、他の質問項目への回答として振り分けた。

聞き取り調査では次の6つの質問に答えてもらった。調査員が誘導したり話を途中でさえ切ることなく、教師に自由に話してもらったため、質問に対応しない回答もあったと思われる。

- 1 担当する外国語の指導で困っていることはありますか？
- 2 担当する外国語を教えていてよかったと思うことは何ですか？
- 3 (生徒の)母語の干渉があると感じることはありますか？あるとしたら、どんなことですか、具体的に教えて下さい。
- 4 日本の小学校で英語に加えて韓国語を教えることについて、どう思いますか？
- 5 これから、日本の小学校で英語と韓国語を教えるとしたら、アドバイスがありますか？
- 6 もう一つの外国語担当の先生と協力していることはありますか？あるいは、協力していけたらいいと思うことはありますか？

3. 調査結果

聞き取り調査に応じてくれた34名は勤務校や教える外国語に違いがあるが、勤務校や指導外国語による集計は行わず、以下、調査結果を質問項目別にまとめていくことにする。

3-1 外国語の指導で困っていること

「現任校ではうまくいっている」と回答した1名を除き、33名から45件の回答が得られた。そのうち、「特に困っていることはない」は2名で、その他は何らかの悩みを抱えていることがわかった。45件の回答を、(1) 教育環境、(2) 授業内容、(3) 生徒のレベル差、(4) 外国語を学ぶモチベーション、(5) カリキュラムという5つのカテゴリーに分類してみた。

最も多かったのは「教育環境」についての悩みで、16件(34.8%)であった。その内容は、「管理者・行政等の外国語指導に関する理解不足」、「家庭における外国語学習への理解不足」、「指導者の人材確保」、「生活環境」に分類できる。「指導者の人材確保」については、発音・語彙力等の観点から、「外国語専門教師が指導するべき」という回答が半数(8件)に達した。「生活環境」については、「外国語との言語の文化的スタイルの違いを教育指導にどのように結びつけるか」という悩みもあった。

次に多かったのは「授業内容」についてで、12件(26.1%)であった。そのうち8件が「読み」「書き」「話す」「書く」の4技能に関する指導に悩むというものであった。「英語をカタカナで書かないと気が済まない生徒に悩む」等、母語の干渉をどのように指導するかという悩みもあった。他の3件は、「外国語の文化的背景や概念を指導する」難しさであった。

「レベル差」の悩みのうち、「転入生や編入生」があつて、同じクラスに学習歴の異なる生徒が混在することによるものは、両校の性質上、なかなか解決が難しいように思われる。「生徒のレベル差」と「外国語を学ぶモチベーション」を分けたが、モチベーションによるレベル差の悩みは「モチベーション」のカテゴリーに、外国語が生活の中で使われるかが「モチベーションに影響する」という悩みは「教育環境」のカテゴリーに分類した。

「カリキュラム」に関した4件は、「外国語授業の時間数」が2件、「教材研究」が2件であった。質問1の回答をまとめると次の表ようになる。

〈表1〉 外国語の指導で困っていること

| カテゴリー (回答数%) | 分類 | 具体例・補足 | 回答数 |
|-----------------------|---|--|-----|
| 教育環境 (16件 34.8%) | ・管理者・行政の理解不足 ・家庭の理解不足 ・指導者の人材確保 ・生活環境の影響 | ・専門外で指導が不安 ・外国語使用の環境にないので定着しない、興味をもたない | 2 |
| | | | 4 |
| | | | 8 |
| | | | 2 |
| 授業内容 (12件 26.1%) | ・4技能に関して ・母語の干渉 | ・「話す」には発音指導を含む ・言語の文化的背景の違い ・カタカナ表記をする | 8 |
| | | | 3 |
| | | | 1 |
| レベル差 (7件 15.2%) | ・外国語学習の開始時期 ・授業中のレベル差 | ・転入生や途中編入生 | 3 |
| | | | 4 |
| モチベーション (6件 13.0%) | ・モチベーションを高める工夫 ・宿題をしない生徒の指導 | | 5 |
| | | | 1 |
| カリキュラム (4件 8.7%) | ・授業数 ・教材研究 | ・授業数が足りない ・教材に工夫が必要 | 2 |
| | | | 2 |
| 特になし (1件 2.2%) | | | 1 |

3-2 外国語を教えていてよかったこと

先に述べたように、東京韓国学校では「英語を」教えるのではなく「英語で」教科を教える教師も含まれているが、その区別はしないで34人の回答結果をまとめてみる。

34名中33名が「よかったことがある」と答え、「現任校で教える分には特にない」という回答が1名であった。33名から得られた49件の回答は大多数が成長や向上を喜ぶもので、(1)生徒の成長に関わる回答、(2)教師自身の成長に関わる回答、(3)生徒と教師両方に関わる回答、(4)その他に分類してみた。

最も多かったのは「生徒の成長」に関するもので39件(78.0%)であった。そのうち12件が「言語・文化の学習への興味をもつようになった」で、「言語そのものが上達した」と「視野が広がり、将来の選択の幅が広がる」がそれぞれ11件と、生徒の成長に教師としての喜びを感じる姿が浮かび上がる。

次に、「教師自身の成長」が6件(12.0%)あり、「教師自身が教えることで語学力向上した」が4件、「異言語使用文化圏への理解が増した」が2件と、教えることで自分自身の成長を感じていることがわかる。

「生徒と教師の両方に関わる」回答は1件(2.0%)で、互いに文化を学びあうことで生徒と文化知識を共有する喜びを挙げている。

〈表2〉 外国語を教えていてよかったと思うこと

| カテゴリー(回答数%) | 具 体 例 | 回答数 |
|----------------------|------------------------|-----|
| 生徒の成長 (39件78.0%) | ・学習への興味が増した | 12 |
| | ・言語そのものの上達 | 11 |
| | ・視野が広がり、将来の選択の幅が広がる | 11 |
| | ・人格形成に役立つ | 2 |
| | ・自然な形で学んでくれる | 1 |
| | ・吸収が早い | 1 |
| | ・論理的思考法を身につける | 1 |
| 教師自身の成長 (6件12.0%) | ・自身の語学力が向上した | 4 |
| | ・異言語使用文化圏への理解が増した | 2 |
| 生徒と教師の両方 (1件2.0%) | ・生徒と文化知識を共有できる | 1 |
| その他 (3件6.0%) | ・教育はストレスフルな仕事だがやりがいがある | 1 |
| | ・英語には教材が豊富にあり教える喜びを感じる | 1 |
| | ・自分にしか教えられないことを教えられる | 1 |
| なし(1件2.0%) | | 1 |

3-3 母語の干渉・影響

34名中、「ない」あるいは「わからない」という回答が4名であったが、30名から61件の回答を得た。それを(1)文法・文構造、(2)発音、(3)表記、(4)その他の4つのカテゴリーに分けてみた。

最も多かったのは、「文法・文構造」に関するもので27件（41.5%）である。この場合の干渉としては、母語と違う外国語に母語の文法を持ちこんでしまうことが多く指摘されている。たとえば、「語順や単数・複数など自国語にない文法体系の間違い」の指摘が13件ある。また、部分的に似ているがゆえに「母語の体系を外国語に持ちこむ」という指摘が8件指摘されている。その内容は、日本語と韓国語間のことで、日本語にも韓国語にもある助詞の使い方（5件）と、動詞の用法（3件）である。助詞の用法では、日本語で「電車に乗る」が、韓国語では「電車を乗る」となるが、相互に母語の助詞を使ってしまうことがある。動詞の用法では、日本語の「ピアノを弾く」が、韓国語では、「ピアノをたたく」となるが、やはり、母語の動詞を外国語に持ち込むというようなものである。

次に多かったのは、「発音」に関するもので17件（26.2%）である。「発音」とだけの回答が5件で、他は具体例をあげている。当然のことと思われるが、母語にない音を出せないで母語の音体系で発音してしまうという指摘が多い。また、日本語と韓国語には同じ漢字でも読み方が違うことがあるが、母語の読み方を持ち込むという指摘もある。

「表記」に関しては、分かち書きの有無、濁点の有無、句読点の違いなど6件（9.2%）の指摘がある。

「その他」としては11件の回答があり、「敬語」という指摘が3件ある。日本語にも韓国語にも敬語があるが、身内にも敬語を使う、絶対敬語の韓国語と、相対敬語の日本語の間に干渉があると指摘されている。

（表3） 母語の干渉・影響

| カテゴリー(回答数%) | 具 体 例 | 回答数 |
|----------------------|--------------------------------------|-----------------|
| 文法・文構造 (27件41.5%) | ・ 語順 | 9 |
| | ・ 自国語にない文法体系の間違い | 3 |
| | ・ 性別 (he と she) や数 (foot と feet) | 1 |
| | ・ 日韓間での助詞や動詞の用法 | 8 |
| | ・ 日韓にない英語の未来時制 | 1 |
| | ・ 英語の単語が混じる | 1 |
| | ・ 外国語にない概念を母語で造語 (brother cousin など) | 1 |
| | ・ 日本人生徒は英語を日本語に置き換えたがる | 1 |
| | ・ 単語を置き換えただけで文とする | 1 |
| | ・ 文法の説明を母語で求めてくる | 1 |
| | 発音 (17件26.2%) | ・ 発音 (母音・子音・濃音) |
| ・ 日本人のカタカナ英語 | | 2 |
| ・ r音とl音の区別 | | 2 |
| ・ 清音・濁音の区別 | | 2 |
| ・ 漢字の読み方 | | 2 |
| ・ z音とth音の区別 | | 1 |
| ・ f音をp音で代用 | | 1 |
| ・ 短母音と長母音の区別 | | 1 |
| ・ 日本語の「つ」音 | | 1 |

| | | |
|-------------------|--|--|
| 表記 (6件9.2%) | <ul style="list-style-type: none"> ・分ち書きをする韓国語と英語、しない日本語 ・濁点の有無 ・句読点の違い ・英語のスペルミス | <p>3</p> <p>1</p> <p>1</p> <p>1</p> |
| その他 (11件16.9%) | <ul style="list-style-type: none"> ・絶対敬語と相対敬語 ・声の大きさやトーン ・ジェスチャー ・学習態度 ・母語にないクラス運営 ・please や thank you という習慣 ・学習年齢による違い | <p>3</p> <p>2</p> <p>1</p> <p>2</p> <p>1</p> <p>1</p> <p>1</p> |
| 無回答 (4件6.2%) | | 4 |

3-4 日本の小学校で英語に加えて韓国語を教えることについて

34名全員から回答が得られた。その結果は、賛成21名(61.8%)、条件付きで賛成11名(32.3%)、反対2名(5.9%)であった。

まず、「反対」の理由をみると、1名は「他の教科の時数を削ることになるので、どの言語の導入も小学校段階では賛成できない」というもので、正規のカリキュラムに組み込むことを前提にした回答である。他の1名の反対理由は、「小学校でやる必要はない。易しいといっても、まだ国際的にはマイナー言語だから」というものである。

次に、「条件付きで賛成」という11名の回答で挙げられた条件11件をみってみる。「負担になる生徒がいる／学年による」が4件、「教え方や教える内容による」が2名、他は1名ずつの意見で、「専門外で教えることを強要される先生には負担になる」、「親の支持が必要」、「小さい時から外国語に触れることはよいが韓国語に限るのは意味がない」、「英語教育がうまくいってから」、「母語をしっかりとやって、二つの外国語の主・従の区別をすべき」というものである。この条件付きで賛成という考えも、大半が正規のカリキュラムに組み込むことを前提にしたものと思われる。

「賛成」の回答とともに、15名がその理由20件と、実施方法や内容に関してのアドバイス3件を挙げている。最も多いのは「近隣だから／相互理解につながる(ひいては自国理解が深まる)」で6件、「視野が広がる」が5件、「未来のために必要」や「大きな財産になる」のように「生徒の利益につながる」が2件、生徒に利するという点では「韓国語を学ぶことで英語が学びやすくなる」という理由も2件ある。「韓国語の語彙や文法は似ているから学びやすい」というものもある。また、上であげた賛成の「条件」となるものへの解決策となるようなアドバイスが3件ある。一つは、韓国の小学校の日本語学習の事例をあげて、「韓国のように、放課後活動として、希望者のみを対象とし、有料(低料金)で」というもので、正規のカリキュラムに組み込まない方法の一つととらえることができる。他は、内容に関するもので、「週に2回はネイティブの先生に教えてもらうこと」、「文法でなく会話に重点をおくこと」というものである。

〈表4〉 日本の小学校で英語に加えて韓国語を教えることについて

| 賛否 (人数 %) | 理 由 | 回答数 |
|----------------------|--------------------|-----|
| 賛成 (21名61.8%) | ・近隣国だから、相互理解(自国理解) | 6 |
| | ・視野が広がる | 5 |
| | ・生徒の利益になる | 2 |
| | ・ほかの外国語学習の助けになる | 2 |
| | ・日本語と韓国語は似ている | 3 |
| | ・実施方法や内容のアドバイス | 3 |
| | ・理由なし | 2 |
| 条件付き賛成 (11名32.3%) | ・対象とする生徒 | 4 |
| | ・指導方法、内容 | 2 |
| | ・教師の負担 | 1 |
| | ・その他 | 4 |
| 反対 (2名5.9%) | ・他教科の時間を削ることになる | 1 |
| | ・小学校では必要ない | 1 |

3-5 これから日本の小学校で英語に加えて韓国語を教える際のアドバイス

34名中無回答が4名で、30名から41件の回答が得られた。回答内容は、(1) 授業内容、(2) 指導方法・指導者、(3) カリキュラム、(4) 開始時期・対象の4つに分類してみた。

最も多かったのは「授業内容」に関するもので13件(28.9%)である。その大部分(9件)が、児童が興味を持ちそうな内容を、歌・ダンス・ゲーム・絵本・アニメ・韓国の遊び(韓国のコマ遊び、凧揚げ、チェギチャギなど)を通して「楽しく教える」で、まずは「発音」をしっかりと教えた方がよいが2件である。

次に「指導方法と指導者」に関するものが12件(26.7%)で、ESL²やEFL³教育ではなく「イマージョンで指導すべき」とする回答が5件あったが、「ESLで指導方法を揃えるべき」という回答も1件あった。イマージョン教育を薦める教師は、実際にイマージョン教育に携わっている教師である。その具体例としては、「足し算を英語で教えてから韓国語でも教える」ことを挙げている。「指導者」に関しては、その「指導力」を重視するようというアドバイスが4件である。

「カリキュラム」に関しては、10件(22.2%)あり、「目標を明確に」が6件、「二つの外国語学習の優先順位の設定」が3件、「韓国語のレベル設定」が1件である。

「学習の開始時期・対象」に関しては6件(13.1%)で、開始時期については、「母語である日本語を習得してから」が3件、「早く始めるのがよい」が2件と、相反する考えがある。また、一斉に学習を始めるのではなく「まずは興味のある生徒から」というアドバイスが1件ある。

〈表5〉 英語に加えて韓国語を教える際のアドバイス

| カテゴリー(回答数%) | 具 体 例 | 回答数 |
|------------------------|---|-------------------------------------|
| 授業内容 (13件28.9%) | <ul style="list-style-type: none"> ・楽しく教える ・発音重視 ・4技能すべて ・テキストは韓国で開発したものを | <p>9</p> <p>2</p> <p>1</p> <p>1</p> |
| 指導方法・指導者 (12件26.7%) | <ul style="list-style-type: none"> ・イメージョンで ・ESLでそろえる ・レベル別クラス ・指導力のある指導者 | <p>5</p> <p>1</p> <p>2</p> <p>4</p> |
| カリキュラム (10件22.2%) | <ul style="list-style-type: none"> ・目標を明確に ・英語と韓国語の優先順位 ・韓国語のレベル設定 | <p>6</p> <p>3</p> <p>1</p> |
| 開始時期・対象 (6件13.3%) | <ul style="list-style-type: none"> ・母語を習得してから ・小さいうちから始める ・興味のある生徒から始める | <p>3</p> <p>2</p> <p>1</p> |
| 無回答(4件8.9%) | | 4 |

3-6 「他の外国語」担当教師との協力・連繋の現状と希望

34名中2名は赴任して間もないため協力態勢がなく、1名は時間切れで回答を得られなかったが、31名から、現在の協力の様子28件とこれから協力したいこと12件が挙げられた。現状も希望も合わせて、(1) 授業内容、(2) 生徒についての情報交換、(3) 指導方法、(4) その他の4つに分けてみた。

最も多いのは「授業内容」に関することで、現状について15件と、希望として2件の合わせて17件(39.5%)ある。そのうち12件が「授業内容を分かち合う」というものであるが、この大多数はイメージョン教育担当教師の回答で、内容や扱うテーマを合わせたり、一方の言語で学習済みのものを別の言語で復習するというシャドーイングが頻繁におこなわれていることが分かる。希望としての1件も、「同じ内容で進めたい」というものである。

次に「生徒についての情報交換」が、希望の1件と現状の9件を合わせて10件(23.2%)あり、全て、生徒の授業中の様子や家庭についての情報交換である。ここで興味深いことは、このような生徒についての情報交換をしているのは、英語担当教師は24名中1名に対し、日本語や韓国語担当教師が13名中9人ということである。

「指導方法」については、現状についての回答が2件と希望が9件、合わせて11件(25.9%)挙げられた。現状についての回答2件は「team-teachingをした」ことであるが、「team-teachingをしたい」という希望が3件ある。また、「他の授業を参観」して自分の指導方法を考えたいとする回答が4件ある。

「その他」としては2件(4.6%)あり、「使用教室について連絡しあう」と「生徒の授業態度への対応の仕方のちがいに理解を求める」というものがある。

(表6) 他外国語の担当教師との協力・連携の実情と希望

| カテゴリー(回答数%) | 具 体 例 | 回答数 |
|---------------------------|--|------------------------|
| 授業内容 (17件39.5%) | <ul style="list-style-type: none"> ・授業内容を分かち合う ・ゲームのアイデアを共有 ・重要な指導内容を理解してもらう ・(希望) 授業内容によって他言語の教師に来てもらう ・(希望) 同じ内容で進めたい | 12 2 1 1 1 |
| 生徒についての情報交換 (10件23.2%) | <ul style="list-style-type: none"> ・授業中の様子や家庭事情 ・(希望) 授業中の様子や家庭事情 | 9 1 |
| 指導方法 (11件25.9%) | <ul style="list-style-type: none"> ・team-teaching ・(希望) 他の授業を参観したい ・(希望) team-teachingをしたい ・(希望) 授業の進め方や教授法を話し合いたい ・(希望) レベル分け方法を聞きたい | 2 4 3 1 1 |
| その他 (2件4.6%) | <ul style="list-style-type: none"> ・教室使用について話し合う ・生徒の授業態度への対応の仕方のちがいに理解を求める | 1 1 |
| 無回答 (3件6.9%) | | 3 |

4. 考 察

今回の調査に応じてくれた34名の外国語担当教師は、60%以上が担当する外国語のネイティブスピーカーで、ネイティブでなくても、その言語使用圏での生活経験を持っている。この点は、現在、日本で「外国語活動」を担当するのが主にクラス担任で、その多くは英語の専門ではないし、ネイティブスピーカーでもないことと大きく違う点である。しかし、小学生を対象に外国語を指導するという点では同じであり、34名の外国語教師としての思いから得られるものも多いと思われる。

二つの外国語を教えている二つの調査協力校の外国語担当教師34名のうち、現任校で二つの外国語を教えていることについて、「とても必要である」と「必要である」と回答したのは約65%であった。この割合は半分を超えてはいるが、80%以上を予想した我々には意外であった。ただ、ソウル日本人学校では、外国語担当教師の全員が「とても必要」と「必要」と回答したのに対し、否定的な回答は東京韓国学校の外国語担当教師からのものである。これは、両校の在籍生徒の日常の使用言語にあると考えられる。東京韓国学校児童(619名)の日本滞留資格が、「永住」(126名)、「定住」(179名)、「一時滞留」(149名)、「二重国籍・外国人」(51名)と多様で(人数は李和枝(2011)より)、日常の使用言語が日本語である生徒が多数いて、日本語が「現地語で外国語である」とは捉えられないことが関係していると思われる。ソウル日本人学校生徒の韓国滞留資格は調査していないが、今回調査した生徒に限ると、90%近くが日常言語を日本語にしている、韓国語を現地語として学ぼうとする土台があると考えられる。

このような事情を反映したと思われるのが、聞き取り調査の「日本の小学校で英語に加えて韓国語を教えることについて」の回答である。条件付きも含めて「賛成」は34名中32名で、「反対」は2

名だけであった。勤務校の現状を捨象しての回答とみることができる。

そこで、今回の調査の目的に照らして、青森県で英語と韓国語を小学校に導入する可能性に結びつくことをまとめてみることにする。

まず、現在の教育課程で他の教科の時数を削って韓国語を導入することは不可能であることを考えると、韓国で行っているように「放課後活動」として導入するのが現実的である。すると、対象は自ずと「希望者のみ」に限られることになる。内容に関しては「楽しく教える」というアドバイスが多数あったが、このような指導方法は、すでに「外国語活動」で積み重ねられた方策が利用できるであろう。韓国語と日本語は語順が同じで、助詞もあり、漢字使用という点でも似ているので、学びやすさがある。ただ、韓国語は日本語に比べて、母音の数も子音の数も多いので「音声」指導は重視されるべきである。「韓国語を学ぶことで英語が学びやすくなる」という指摘があったが、音声面での例をあげると、日本語では「さんま」の「ん」と「さんにん」の「ん」と「かばん」の「ん」の違いは意識されないが、この3つの「ん」は、韓国語では区別されるものであり、この区別は英語にもある。また、韓国語には子音で終わる語の次に母音で始まる語が続くと「連音化」が生じるが、これは英語にもあることである。ほぼ、一字に一音が対応する日本語と違って、前後の音によって音変化が生じることは韓国語ではしばしば生じることである。このような「音変化」に対する意識は、英語学習にも活かされるはずである。小学校学習指導要領「外国語活動」の内容について、「外国語の音声やリズムなどに慣れ親しむとともに、日本語との違いを知り、言葉の面白さや豊かさに気付くことを指導する」とある。韓国語と日本語は、「似てるけど違う」、「違うけど似てる」と気付くのに適しているペアである。このような「気づき」は、他の外国語を学習する時に必ず役に立つものになる。

誰が指導するかは、大きな問題である。小学校の現職教師は「外国語活動」の導入で、物理的にも心理的にも、これ以上の負担は負えないと思われる。すでに「外国語活動」で導入されているように、地域にボランティアを求めることも考えられる。また、青森県内各地の韓国語学習サークルの実情を探ったり、県内在住の韓国語を母語とする人たちのネットワーク等を活用すれば、解決できるように思われる。

現行の「外国語活動」は英語を取り扱うことを原則としているが、外国語活動の目標として挙げられている3つの柱は、唯一の国際便として韓国仁川空港への直行便をもつ青森県で韓国語学習を通して達成できると思われる。外国語活動の3つの柱とは、①外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深める、②外国語を通じて、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図る、③外国語を通じて、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませる、である。ここで「外国語」を「韓国語」に読み替えても、青森県では十分に達成できそうである。

本稿では、外国語教師対象の調査結果をまとめたが、同時に行った生徒へのアンケート調査と聞き取り調査の結果も踏まえて、青森県内の教育関係者や観光関係者等を交えて議論を深めていきたいと考えている。

* 今回の調査を許可して下さった、ソウル日本人学校の清村幸一校長先生と東京韓国学校の故梁源澤前校長先生に感謝いたします。校長先生のご逝去から間もない時期の調査実施に、細やかな配慮をして下さった東京韓国学校初等部前校監・李和枝先生と初等部校監・徐福姫先生、調査に応じてくれた両校の外国語担当教師と生徒の皆さん、調査の際に援助を惜しなかつた両校の教職員の皆さんに感謝いたします。

調査日前、平成24年8月末に逝去された故梁源澤前校長先生のご冥福を心からお祈り申し上げます。

- ¹ ソウル日本人学校では小学部在籍子女を「児童」と、東京韓国学校では初等部在籍子女を「学生」と称しているが、本稿では「生徒」ということにする。
- ² ESL (English as a second language) とは、第二言語として学習する英語のこと。ESL学習者とは、広い意味では外国語としての英語学習者を含むこともあるが、狭い意味では英語を第二言語として日常生活の中で学ぶ者のことを指す。(『英語教育用語辞典』(2011)、大修館)
- ³ EFL (English as a foreign language) とは、外国語として学習する英語のこと。EFL学習者の場合、主に学校の授業を通して英語を学び、いったん教室の外に出てしまうと、そこではほとんど英語との接触がない。例えば、日本人の中学生、高校生にとっての英語は、典型的な EFLとしての英語である。(上掲書)

参考文献

- 李 和枝 (2011) 「小学校で二つの外国語を教えること～東京韓国学校初等部の実践～」、青森グローバル教育研究会主催公開講演会講演、2011年8月6日、弘前大学。
- 白畑知彦・富田祐一・村野井仁・若林茂則 (2011) 『(改訂版) 英語教育用語辞典』、大修館。
- 文部科学省 (2007) 『小学校学習指導要領解説 外国語活動編』、文部科学省。